

一〇代目 大庄屋御手洗善左衛門（はじめ善三郎

のち善三という）

表紙解説

弁才天 青山黒沢 東光庵 所蔵

天保 四年（一八三三）より代勤。

天保一四年（一八四三）九日晦日、申渡書付、五〇両

献金、料理、受刀

嘉永 二年（一八四九）大庄屋となる。五月二十八日申渡

書付（其方親与兵衛儀……）

嘉永 五年（一八五二）二月二十九日夫食の件の文書。

安政 二年（一八五五）二月申渡書付、名字刀御免。

慶応 二年（一八六六）大庄屋をやめる。

紺屋 太猪 助

大庄屋御手洗与兵衛 次男、明治三年九月平民が苗字を許されたとき、御手洗平太（平左衛門）を名乗り、分家しこうやの初代となった。

ダイベンザイテン（天名）また、ダイベンザイクドクテン、弁才と云う。弁財に作るは非なり、中略、弁才天は河の神格化せるものにして、妙音と能弁とその河の流水の音楽そのものなり、故に今日なお琵琶を象徴せり。
弁才天三部経に、宇賀神将菩薩白蛇示現云云、また宇賀神王あり顕現（げげん）す、形天女の如く、頂上に宝冠あり、冠中に白蛇あり蛇の面老人の如くにして眉白し。宇賀は弁才天の尊号也。

（織田仏教大辞典）

軸丸 勇